

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：32103

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00345

研究課題名（和文）会津地方の俳人来翰集及び句帖解読による文化文政期の俳諧研究

研究課題名（英文）Research on haiku poetry in the Edo period by deciphering letters addressed to haiku poets in the Aizu region

研究代表者

二村 博（Nimura, Hiroshi）

常磐大学・人間科学部・准教授

研究者番号：00733669

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代中期から後期にかけて会津喜多方で活動した関本巨石とその息子の如髪に宛てられた書簡や句稿資料約240点を貼り付けた卷子本四巻の解読調査をした。また、それと同時に如髪が関西旅行において収集した各地の俳人約200名の自筆資料を解読調査して、全国的な範囲で親しくした当時の俳人たちの交流実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化文政期は全国的に俳人間の交流がなされた俳諧の爛熟期であるが、まとまった来翰集の研究は進んでいない。本研究では、会津の関本巨石・如髪父子宛の書簡を調査することにより、その広い交流の実態を解明することができた。また、新資料「如髪集成染筆帖」と照らし合わせて調査することで、文化期において如髪が行った二度の関西旅行と、各地の著名俳人たちとの交流を具体的に解明できた。巨石・如髪が関西に足を運んで対面の交流を繰り返していたことが判明し、商業ルートを活用して商家としての生業と風雅の双方に相乗効果をもたらしていた。本研究によって、俳諧を嗜む近世庶民の交流実態の一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：About 240 letters and haiku manuscripts addressed to Sekimoto Kyoseki and Johatu, who were active in Kitakata, Aizu from the mid to late Edo period, were deciphered and researched. At the same time, he deciphered and researched the handwritten materials of about 200 haiku poets in various places that Jokatu collected during his trip to Kansai, and clarified the actual exchanges between haiku poets at that time, who were close to each other on a nationwide scale.

研究分野：近世俳諧

キーワード：俳諧 俳人書簡

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

関本巨石と如髪は近世中期から後期にかけて、陸奥喜多方(現福島県喜多方市)において二代にわたって活躍した俳人父子である。彼らは広く全国の著名俳人と交流し、受け取った書簡は卷子本(四巻)に収録されている。これらの書簡の一部は、『俳人藤森素槩全集』(矢羽勝幸・二村博共編著 1998年 信濃毎日新聞社)、『俳人塩田冥々 人と作品』(矢羽勝幸・二村博共編著 2003年 象山社)等で解読発表したが、書簡群全体を解読する調査報告はこれまでなかった。俳人来翰集の先行研究にはまず、『武陵来翰集』(大谷篤蔵編 1976年 西尾精一刊)が挙げられる。同書は丹波の俳人西尾武陵宛の書簡433通を翻刻したものである。また、『書簡による近世後期俳諧の研究 「俳人の手紙」正統編注解』(矢羽勝幸編著 1997年 青裳堂)は、信濃の成沢雲帯宛の877通を翻刻し、注解を加えた不朽の労作である。関西の武陵、甲信越の雲帯宛の書簡集解読は、全国的に俳人間の交流がなされた文化文政期の俳諧を解明する上で裨益するところが大きい。しかし、東日本における俳人宛のまとまった来翰集研究はこれまでなかった。本研究によって、文化文政期俳諧研究の未開拓領域を検証できるという当初の目算はあった。また、来翰集調査と同時に、関本如髪が関西旅行に携行して各地の著名俳人による揮毫を蒐集した新資料「如髪集成染筆帖」を調査し、関係俳書、句碑等を行うことにより、書簡の年代特定、如髪の旅の行程、来館集全体の構成等を明らかにできるという見通しを持って調査を開始した。

### 2. 研究の目的

本研究は、新資料「如髪集成染筆帖」と、関連する喜多方の巨石、如髪来翰集、関係俳書、建立句碑等の解読調査を行うことを通じて、文化文政期における近世俳人たちの交流実態を実証的に解明することを目的としていた。喜多方の関本巨石・如髪父子は、近世中期から後期にかけて、全国の著名俳人たちと広く交流をしている。関本家が蒐集していた書簡集は大阪公立大学が所蔵しており、その書簡内容の全貌はこれまで未解明であった。この書簡集を解読するだけでも調査する意義は十分あるが、本研究では如髪が二度の関西旅行において携行した新資料「如髪集成染筆帖」を解読調査することによって、如髪が文化期に行った二度の関西旅行の行程、各地の俳人との交流実態、書簡の執筆年代の特定等、様々な新事実を明らかにすることができた。文化文政期は俳諧の爛熟期といわれるほど享受者人口が多い時代であったが、元禄期と比較すると基礎的な研究が進んでいない。これまで一茶のみが注目されてきた文化文政期の俳諧文化は、今後も広い見地に立って実証的調査することが必要となるだろう。

### 3. 研究の方法

本研究は、「如髪集成染筆帖」と「関本家集成の来翰集」の両方の解読調査を行い、この二本柱の資料を照らし合わせて調査を行うことにより、各事象を有機的に結びつけて実証していくという方法を行った。文化文政期の俳諧の実態を正確に解明していくためには、全国各地で活動した俳人たちについて丁寧に調査し、作品、交友関係等を把握していく必要がある。そのためには俳人書簡の解読が重要になる。ただし、俳人書簡にも調査上困難な点がある。一つは、書簡にはたいがい執筆月日が記されているが、執筆年代は記されておらず、年代特定調査が必要だということである。そこで役に立ったのが新資料「如髪集成染筆帖」の存在である。同資料は文化八、九年(1811、1812年)と文化十四年(1817)年の二度にわたる如髪の旅行経路、交流俳人、執筆年代が特定できる貴重な資料である。この「如髪集成染筆帖」調査を並行することによって、書簡群を解読するだけでは知り得なかった書簡の年代特定を数多く行うことができた。さらに、各俳人が出版した撰集、建立句碑等の資料調査を行い、安永天明期、文化文政期俳諧における俳人の交流実態を数多く明らかにすることができた。

### 4. 研究成果

研究成果についてはまず年度ごとの成果を(1)~(3)に記し、(4)総合的な成果(5)今後の課題という順序で述べたい。

#### (1) 令和2年度

令和2年度はまず、「如髪集成染筆帖」を購入し、これを解読調査した。同資料は如髪が染筆帖として携行した冊子を切り取り、手鑑に貼ったものを桐箱に入れて大切に保存したものである。東北から関西にかけてのべ237人による揮毫があった。巻頭は当時の東北俳壇を代表する本宮の塩田冥々が序文を草しており、開始年代が文化八年(1811)十一月である。その後の揮毫者の居住地により、如髪は、江戸(巢兆・護物・寥松) 相模(葛三) 駿河(菅雅) 三河(卓池) 尾張(土朗・岳輅) 近江(亜溪・志宇) 京都(蒼虬) 大坂(長斎)を巡って関西において越年したことが揮毫発句の季語から判明する。さらに、この文化八、九年の旅において交流した俳人からの書簡・句稿が「如髪集成来翰集」(第一巻・第二巻)から34点もあることが判明した。これらの調査結果を「関本如髪集成来翰集(第一巻)」(2021年3月 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』第38巻2号)にまとめた。本稿は日本全国の俳人から会津の関本如髪に宛てられた書簡等64点を紹介し、注釈を加え、差出人を地域別に分類して、執筆年代特定

等の考察を加えたものである。

## (2) 令和3年度

令和3年度は「如髮集成染筆帖」と「如髮集成来翰集」の対照調査をさらに進め、如髮の文化十四年(1817)の関西旅行の成果が『河上集』(文化十四年 如髮編)に集約されていることがわかった。芭蕉の生誕地伊賀において現地の俳人と交流し、芭蕉手植と伝わる瓢竹庵の桜の木を持帰ったことが『河上集』に記されていた。

来翰集調査の結果としては、「関本如髮集成来翰集(第二巻)」(2021年9月 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』第39巻1号)を発表した。本稿は会津の如髮宛に日本全国から寄せられた書簡等58点を紹介し、注釈を加え、差出人を地域別に分類して考察をものである。その結果、如髮宛の文化文政期書簡が第一巻、第二巻にまとめられており、『河上集』(文化十四年 如髮編)がこれらの交流の集大成として刊行されていたことが明らかになった。

「如髮集成染筆帖」が文化期の俳人の揮毫を集めたものであることが判明し、「如髮集成来翰集」は解説を進めていくうちに、第一巻、二巻が如髮宛の書簡、第三巻、第四巻が如髮の父の巨石宛のものが中心であることがわかってきた。そこで、第72回俳文学会全国大会研究発表「関本如髮集成染筆帖 化政期会津俳人の西国旅行」(2023年10月 オンライン開催)において、如髮が各地の著名俳人による染筆を集成した新資料「如髮集成染筆帖」を紹介し、如髮宛書簡等の資料と対照して、文化期における二度の西国旅行について、年代、行程、交流俳人、交流実態について研究発表を行った。

この発表の成果は、「化政期会津俳人の西国旅行 『関本如髮集成染筆帖』を中心に」(2023年3月 連歌俳諧研究142号)にまとめた。『関本如髮集成染筆帖』は文化期に如髮が関西各地を旅して著名俳人たちからの染筆を蒐集した貴重な一次資料であること、この資料と如髮宛の書簡集を対照することにより、化政期俳諧の諸派交流の実態の一端を示すことができた。また、如髮が東海道を中心とした商用ルートを活用しつつ、家業と俳諧を両立していたことを明らかにした。

さらに、巨石宛の書簡集を調査し、「関本如髮集成来翰集(第三巻 巨石宛)」(2022年3月 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』第39巻2号)を発表した。本稿は巨石宛書簡を中心とした書簡、句稿64点を紹介し、注釈を加え、差出人を地域別に分類して考察したものである。これまでの調査結果により、「如髮集成来翰集」は第一、二巻は文化文政期における俳人の書簡集であり、第三巻が概ね安永・天明期の書簡を収録していることがわかった。第三巻には中興期を代表する暁台、也有、の句稿や、蝶夢、白居、旧国(大江丸)、牧之、湖十といった著名人の書簡が含まれている。これらにより中興期の名家と巨石が知友関係にあったことが判明した。また、土佐、豊前、筑後、筑前といった四国、九州からの書簡は、如髮宛(第一、二巻)には見られなかった地域からの書簡で、これらは、『謡百番発句合』の出版企画を巨石が行っており、謡曲の題に因んで詠んだ句を、広く全国各地から募っていたことが判明した。そして同書の出版企画が、京都の五升庵蝶夢の協力を得ていたことも複数の書簡内容から明らかになった。

## (3) 令和4年度

令和4年度は、来翰集調査結果報告の総仕上げとして、「関本如髮集成来翰集(第四巻 巨石宛)」(2022年9月 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』第40巻2号)を発表した。第四巻の巻末は陸奥の俳人大屋土由の跋文で締め括っており、それによれば、如髮の孫にあたる関本半岱が綴り合わせて四巻としたと述べている。しかし、もしも半岱が四巻全てを綴り合わせたとすれば、なぜ、一、二巻を巨石宛(安永・天明期)、三、四巻を如髮宛(文化文政期)にしなかったのかという疑問が浮かび上がる。この疑問を念頭に置きながら書簡・句稿資料の貼り付け配列に着目すると、第一巻の卷子本の末尾に半岱宛の書簡が二通があることが注目される。これは、第一巻の末尾の空白部分に半岱自身が貼ったものである。また、第二巻の配列に着目すると、第二巻の巻末の7名からの書簡はすべて、喜多方の如髮とは身近な陸奥の俳人からの書簡になっている。第一巻、第二巻は巻頭の方に著名俳人からの書簡を提示し、卷子本として見ることの困難な巻末に価値の低いと判断した資料がある。つまり、第一巻、第二巻が本来はひとまとまりの如髮来翰集になっていたことを物語っている。新資料「如髮集成染筆帖」と対応している書簡もすべて第一、二巻に収録されており、これらは文化文政期の俳諧研究に裨益する資料群である。また、第一、二巻のそれぞれの資料の始めには、すべて執筆者の住所・雅号等を記した付箋が付けられている。それに対して、第三巻、四巻では合計18点に付箋がない状態になっている。これは、第一、二巻が書簡を受け取った如髮本人によって集成されたものであるからだろう。そして、第三、四巻はそれより古い安永・天明期ものが中心であったため、差出人の特定がしにくかったと思われる。第四巻の末尾は、第二巻同様地元陸奥俳人のものが中心になっている。第三、四巻は巨石宛のものを中心に巻頭から貼り付け、その後半の空白に半岱が残りの資料を貼り、幕末の東北俳壇を代表する土由に跋文を乞うたのである。土由跋文によれば、「巨石・如髮の二翁相継て俳諧に名高く、弥好みて家声を墮せず弥好て益富り。其子直有、其孫半岱の人々又風雅の家声を墮せず弥好て益富り。」とある。関本家が遺した四巻の書簡群は、今後近世中・後期の俳諧研究を進展していくことによって、俄然存在感を増していくことになるであろう。

#### (4) 総合的な成果

新資料『如髪集成染筆帖』は、如髪が染筆帖として携行した冊子を切り取り、手鑑に貼ったものを桐箱に入れて保存したものである。東北から関西にかけてのべ237人による揮毫があり、巻頭は当時の東北俳壇を代表する本宮の塩田冥々が序文を草している。染筆の開始年代は文化八年(1811)十一月で、その後の揮毫者の居住地により、如髪が江戸(巢兆・護物・蓼松)、相模(葛三)、駿河(菅雅)、三河(卓池)、尾張(士朗・岳輅)、近江(亜溪・志宇)、京都(蒼虬)、大坂(長斎)を巡って関西において越年したことが揮毫発句の季語から判明する。さらに、この文化八、九年の旅において交流した俳人からの書簡・句稿が「如髪集成来翰集」(第一巻・第二巻)から34点もあることが判明した。また、如髪は文化十四年(1817)年正月に再び冥々の序文を得て関西旅行に出かけ、須賀川(雨考・多代女)、江戸(護物・対竹)、三河(卓池)、尾張(岳輅)、伊勢(椿堂)、京(蒼虬・定雅・雪雄)、大坂(長斎)、伊賀(寄流)を巡って、夏には信濃(素檠・雲帯)に立ち寄っている。跋文は近江の志宇女が草している。

「如髪集成来翰集」(全四巻 大阪公立大学所蔵 資料名は「名家消息」)は、卷子本四巻に収録された喜多方関本家に伝来した来翰集である。調査を完了した全四巻の内訳を以下に挙げる。

- 第一巻64点 如髪宛書簡33通、如髪以外に宛てられた書簡5通、句稿26点
- 第二巻58点 如髪宛書簡39通、巨石宛書簡2通、宛名不明、その他書簡4通、句稿13点
- 第三巻64点 巨石宛書簡45通、(そのうち巨石・可直宛名宛12通、巨石・如髪宛名宛1通)、可直宛書簡2通、宛名未詳書簡1通、句稿14点(そのうち巨石句稿1点)
- 第四巻62点 巨石宛書簡38通(そのうち巨石・可直宛5通、而后・可直・巨石宛1通)、而后・可直宛1通、可直宛1通、その他宛2通、句稿18点、跋文1点)

第一、二巻は如髪来翰集であり、これらの書簡と「如髪集成染筆帖」を対照すると、如髪に関西旅行で実際に対面して交流した俳人からの書簡、句稿が50点ほどみられる。如髪は商用ルートの東海道を中心に関西旅行をしていたが、父巨石もまた同様の関西旅行をしていたことが、複数の書簡から判明する。こうした商用ルートの活用は、商家としての生業と風雅の双方に相乗効果をもたらした。東北の僻地喜多方に居ながら全国の著名俳人と交流できた背景には、巨石、如髪父子が関西に足を運んで対面の交流を繰り返していたことがその要因であることがわかった。

#### (5) 今後の課題

今回の研究において調査対象となった安永・天明期、文化文政期の俳諧研究は途上であり、今後の課題は枚挙に暇がないが、さしあたって如髪と同時代に会津高田にいた田中月歩宛の来翰集を解読調査することが最も重要であると考えられる。月歩は如髪とともに会津俳壇の双壁として活動した当地の代表的な人物である。月歩の来翰集は今回調査した巨石・如髪宛のように卷子には貼られておらず、一点一点が差出人別に保存されている。差出人の情報を示す付箋もないため、調査は困難だが、今回の研究成果を踏まえて同時代の月歩来翰集の調査を行えば、数百通にのぼる「近世会津俳人来翰集」をまとめることが可能になる。この課題については、基盤研究(C)「田中月歩来翰集解読調査と近世会津俳人来翰集編集による文化文政期の俳諧研究(令和5年~7年)において推進していきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 二村博	4. 巻 第39巻1号
2. 論文標題 関本如髪集成来翰集（第二巻）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』	6. 最初と最後の頁 82-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二村博	4. 巻 第39巻2号
2. 論文標題 関本如髪集成来翰集（第三巻 巨石宛）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』	6. 最初と最後の頁 146-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二村博	4. 巻 第四百十二号
2. 論文標題 化政期会津俳人の西国旅行 『関本如髪集成染筆帖』を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 連歌俳諧研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二村博	4. 巻 第38巻第2号
2. 論文標題 関本如髪集成来翰集（第一巻）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』	6. 最初と最後の頁 65-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 二村博	4. 巻 第40巻
2. 論文標題 関本如髪集成来翰集（第四巻 巨石宛）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』	6. 最初と最後の頁 43-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 二村博
2. 発表標題 関本如髪集成染筆帖 化政期会津俳人の西国旅行
3. 学会等名 俳文学会全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------